

適正施設ガイドライン

【オオワシ *Haliaeetus albicilla*】

2020年9月

公益社団法人日本動物園水族館協会

はじめに

オオワシは寒帯から温帯の海岸、河川、湖沼に生息する大型のウミワシ類で、冷涼な環境を好み、氷点下の厳しい低温環境にも耐えることができる。飼育施設は、風通しの良い屋外飼育を基本とするが、一時的にでも屋内で管理する場合は、十分な広さの施設で温度、湿度、換気、採光の管理を適切に行うよう努めなければならない。

また、オオワシは動物愛護法で規定する特定動物に指定されており、禽舎の構造等については、所管する自治体の基準に従う必要がある。

1 飼育環境

1-1 温度・湿度・換気

1) 温度

オオワシは低温環境に強く、氷点下 10℃以下の環境にも耐えることが可能であるため、健康な個体であれば冬場の温度管理は必要ない。風通しがよく直射日光を避けるための日除け等を設けることで 30℃の高温環境にも適応できる。

室内で飼育する場合は常温管理で問題ないが、最大でも 30℃以下に保つことが望ましい。

2) 湿度

屋外施設では特別な湿度管理は必要ない。

屋内施設では、アスペルギルス症などの感染症を予防するために、換気口などを設け、80%を超える多湿環境、特に高温多湿は避けるべきである。

3) 換気

屋外施設では換気は必要ない。

屋内施設では、湿度管理のために、換気窓や換気扇などの換気設備を設け、室内の空気の動きを作る必要がある。換気設備を設ける場合は、空気が効果的に流れるように設置場所に留意する。また網戸や金網などによりオオワシが直接換気扇に触れたり、逃走しないように配慮する。

1-2 照明（日照、人工照明、照明時間など）

屋外施設では照明は必要ないが、巣台の上及び獣舎の一部には直射日光や風雨を避けるための屋根を設置する必要がある。

屋内施設では、自然光を取り入れるための採光用の窓を設置する。繁殖のために日照時間をコントロールする必要はない。獣舎内に人工照明を設置する場合は、オオワシが直接触れることの無いよう配慮する。

1-3 音、振動

個体によっては音、振動、動きのあるものに対して過敏に反応することがあり、壁面への衝突などの事故を防ぐため、大きな音や振動が出るような作業は避けるべきである。特に動物の搬出入、抱卵、育雛期には特に配慮が必要である。

1-4 施設の数、規模

オオワシは、短期間であれば飛翔不可能な狭小な施設で飼育することが可能であるが、特別な理由が無い限りは、行動の自由を妨げず、ある程度飛翔できる広さの屋外施設で展示すべきである。

1) 施設の数

飼育施設は、基本的に屋外施設とする。オオワシは、多頭数飼育及びオジロワシ等との異種混合飼育が可能であるが、飼育頭数に応じた広さが必要となる。継続的に繁殖

をする場合は、繁殖個体を分けて飼育するための施設も必要となる。

飼育施設のほかに、一時的に隔離するための小規模な一時保管室を設けることが望ましい。また、傷病個体などを将来的に野生復帰させる場合は、飛翔能力を養うために大規模なトレーニングケージが必要となる。

2) 施設の規模

雌雄2羽を飼育するには、最低でも幅10m×奥行5m×高さ4.5mの規模が必要である。安定した繁殖成績を得るためには高さは6m以上が望ましい。面積は1ペアあたり50㎡以上の面積が必要となり、さらに1羽増えるごとに17㎡の広さを要する。一時保管室の規模は、過度な広さは必要なく幅3m×奥行3m×高さ2m程度の規模でよい。

野生復帰用のトレーニングケージは、野生復帰に耐えうる飛翔能力を養うために、幅12m×奥行40m×高さ8m以上の規模の施設が望ましい。

3) 産室、巣箱

野生下ではトドマツなどの針葉樹の樹冠に営巣することから、4方を壁に囲まれた産室は必要ない。営巣のための巣台は3.5m以上の高さに設置する。十分な高さを確保できない場合は、二面に壁で隠すなど、安心して営巣できるように配慮する。巣台は、1.2m～2m四方の広さの平面または、すり鉢状とする。平面の巣台の素材は木製（丸太）または鉄製とし、巣材や雛の転落防止のため、巣台の側面を板や丸太などで20～40cm程度立ち上げる。すり鉢状の巣台は直径1.2～1.4m、深さ50cm程度の鉄製とし、巣材の落下を防ぐため、巣台の底面に2.5cm×2.5cmの金網やタキロンネットなどを貼るとよい。

巣材は松などの針葉樹の枝葉や麦藁を用意する。巣台の底面に金網等を貼る場合は、爪が金網に絡まないように、巣台の底にあらかじめ巣材を満たしておく。

個体の健康維持には年間を通して屋外で管理し、雨風や季節性に晒されることが重要であるが、悪天候からの保護のため、巣台の上部等、獣舎の一部の屋根は鉄板や合板などで覆うとよい。

1-5 構造、設備

1) 構造・側面、天井面

屋外施設の構造は鉄骨造、一部コンクリート造、木造が考えられる。展示か非展示かによって造作は異なってくるが、非展示であれば、壁面全面が壁で、一部に窓、そして、雨風を入れるために屋根面の大部分を網で覆ってしまえば、飼育は可能である。この場合、網の材質や形状はその地域によって異なってくるが、積雪地では素材の選択に十分な配慮が必要となる。展示する場合は、最低でも壁の1面と天井の一部分は見える状態にしておく必要があり、網を用いる場合は溶接金網、菱形金網、ワイヤー格子などを使用する。金網は線径3mm以上、50mm×100mm以下のものがよく使用されるが、高病原性鳥インフルエンザ予防として野鳥の侵入を防止するためには金網の間隔を20mm以下とするか、20mm以下の防鳥ネットを利用することが推奨される。

屋内施設については、屋外施設と同等以上の強度が確保されて入れば特別な構造は必要ないが、ガラスを使用する場合は、衝突防止に配慮する。

なお、オオワシは動物愛護法の特定動物に指定されているため、所管する自治体の特定動物飼養施設基準にしたがって、適切な獣舎設計を行う必要がある。また、獣舎には逃走防止のため、二重扉または前室を設ける必要がある。

2) 床材

地面の床材は、砂利（大磯、川砂利など丸いタイプ）、砂、土が望ましい。着陸時の衝撃緩和及び肢瘤症予防のため、コンクリートなどの平滑で堅い素材は避ける。もし床面がコンクリートであるならば、底面もしくは側面に排水口を設置し、30cm程度の厚さで砂利（大磯など丸いタイプ）を敷くと良い。床が自然の地面の場合は、外部からの捕食動物の侵入防止のため、地下1m程度の深さに金網を埋設するとよい。砂利を使用する際は、稀に好んで大量に採食する個体がいるため、最初は観察が必要である。

3) 飲水、プール

水浴び用のプール及び飲水施設が必要であるが、プールの水を清潔に保つことで飲水施設を兼ねることができる。水浴び用のプールは広さ1.2m×1.2m以上、水深20cm以上の規模とし、材質はコンクリート、FRP等の耐水素材とする。

4) 餌台

餌台は複数羽飼育の場合は、複数箇所設置することが望まれる。

餌台の高さはネズミなどが侵入しても接触できない高さとし、形状が必要である。給餌とプールの換水は、獣舎内に入らずに、外部から行える構造が望ましい。

5) 止まり木

止まり木は最低でも2本以上必要である。飛翔距離を伸ばすため、獣舎の対角線上に配置する。また、巣立ち雛や負傷個体等でも獣舎上部に移動できるように、止まり木を配置する高さや場所に注意する。また、鳥の翼が傷むのを防ぐため、止まり木の周囲には十分な空間を作るように配置する。

止まり木の素材は、肢瘤症予防のため、不整形な自然木が最も適しているが丸太などを使用する場合は、硬めの人工芝を巻きつけたものでも予防が可能である。直径6.6～10cm、長さ1.2m～5.5m程度が望ましい。